

<書評>

Maurice Fitzpatrick 著
The Boys of St. Columb's
 (The Liffey Press, 2010年)

高 井 美 紀 子

「40年代後半の教育法の施行は、北アイルランドの教育の発展において決定的な日であったという議論が将来必ず起こるだろう。なぜなら、それによって、教育の恩恵を受けた人々が、『イギリスにおいて人々に一人一票の選挙権があるのなら、なぜここではそうではないんだ?』と立ち上がり、議論できるようになったからだ」(121)。フィル・コールター (Phil Coulter) は、インタビューの中で北アイルランドにおける1947年の教育法の意義について訊かれ、このように答えている。本書は、この教育法によって、無料の中等教育を受けることになった最初の世代へのインタビュー、及びインタビュー答弁者同士の対談集であり、その顔ぶれは、デリー司教のエドワード・デイリー (Edward Daly)、ノーベル平和賞を受賞した政治家のジョン・ヒューム (John Hume)、ノーベル文学賞を受賞した詩人のシェイマス・ヒーニー (Seamus Heaney)、作家兼詩人兼批評家であるシェイマス・ディーン (Seamus Deane)、ジャーナリスト兼社会主義活動家であるイーモン・マカン (Eamonn McCann)、音楽家のフィル・コールター、外交官のジェイムズ・シャーキー (James Sharkey)、シンガー・ソングライターのポール・ブレディ (Paul Brady) の8人。彼らは皆1933年から1947年の間に生まれ、イレブン・プラス (中等教育コース選定試験) に合格し、カトリック教徒としてデリーの聖コラムズ・コレッジにおいて中等教育を受けた。

本書の中心主題である、北アイルランドの教育法の意義についての考察は、この地が長年置かれてきた政治的状況の正確な理解なしにはありえない。著者は、本編のインタビューの前に設けた背景・歴史の章で、1920年のアイルランド統治法を経て、グレート・ブリテン及びアイルランド連合王国の一員としての北アイルランド国が正式に発足して以来、この地のカトリックの大衆が置かれてきた政治的・文化的な抑圧状況について解説をしている。その抑圧の象徴ともいえるものが、カトリック系の住民を押さえつけるためにユニオニストらが推し進めてきた不公平な選挙区割り、ゲリマンダー（gerrymander）であった。1947年の教育法によって無料中等教育の恩恵を初めて受けた世代の公権利への目覚めは、1960年代になるとアメリカの公民権運動の影響も受け、北アイルランドにおける公民権運動の大きなうねりへと繋ってゆき、選挙法の改正はその運動の最大の目標となる。しかし、その道のりは、1968年のデモ弾圧、1972年のイギリス軍による非武装の市民デモの武力鎮圧（血の日曜日事件）といった苦難と試練を伴うものであった。本書の基調を成すのは、1947年の教育法が、いかに困難を伴おうとも、その後の北アイルランドの改革を推し進めるきっかけとなったという著者の揺るぎない姿勢である。

インタビューに答える8人は、いずれも各界の著名人である。彼らの多くは、聖コラムズ在学中のごく若い時期からその才能を発揮し始め、卒業後はその能力の開花を通じて各々の立場から北アイルランドの改革に携わって来た。例えば、マカンとは、在学中から優れた弁論家であったし、コールターやブレディはその音楽的才能において際立っていた。卒業生の多くは、大学に進学したが、それは彼らの両親の世代では考えられないことであった。イギリスの植民地支配の下で、長らく政治的にも文化的にも抑圧された状況にあった北アイルランドのカトリック系の住民が、教育によって社会の様々な分野に進出する切符を得て、自分たちの置かれた状況に目覚めた意義は限りなく大きい。マカンは、「聖コラムズに行き、クイーンズ大学に行った後、デリーに戻ってきた者は、もはや二等市民として扱われることを決して受け入れはしないだろう」（109）と言っている。デイリーは、「教育とは解放である。教育を受け、思考することができるようになり、不平をはっきりと言葉にすることができるようになった人々は、それによって解放される」（35）と述べている。聖コラムズで過ごした日々が、彼らのすべてにとって、その後の人生の出発点となっているのは明らかである。

しかし、8人が語る聖コラムズの思い出は、決して全面的に肯定的なものばかりではない。特に、殆ど全員が、在学中に体験したひどい暴力について言及し

ていることは、注目すべき点であろう。教師や上級生によって日常的に振られる暴力は、彼らの心に大きな傷を残したが、彼らが受けた校内で受けた暴力は、北アイルランド社会に深く根付いた暴力的空気の表出でもあった。その意味で、皮肉にも、聖コラムズでの暴力は、彼らがその後実社会に出て、様々な現実の困難に立ち向かってゆく上での準備をすることにもなった。同校で受けたひどいいじめについて語るブレディは、「私が聖コラムズで学んだことは、いかにして独り立ちするかということだ」(183)と語っている。聖コラムズは、彼らに、北アイルランドにあってカトリックであるという公的なアイデンティティの確立を促すとともに、個人としてどうあるべきかという問題と向き合うことも余儀なくした。それは、答弁者の言葉の端々から伝わって来るように、痛みを伴う体験であったのである。

本書は北アイルランドの民族問題という個別的事情だけに留まることなく、様々な普遍的な問題提起やメッセージを我々に投げかける。例えば、対談においてディーンとヒーニーは、イギリス軍の血の日曜日事件における武力介入を肯定するために、国家の法を個人の倫理に優先させているものとしてソフォクレスの悲劇『アンティゴネー』を読む保守反動の批評家を厳しく非難する。また、現実の問題からあまりにも乖離した美的世界に逃避する学究的態度へのディーンの鋭い批判も印象深い。政治家として北アイルランド問題に携わってきたヒュームは、「それぞれの違いを尊重すること」(49)こそ紛争解決の第1の原則であると言う。音楽という自分の天職への情熱を語るコールターは、「あらゆる簡単な物事は、語るに値しない事物だ」(132)と、人生における努力の意義を強調する。これらの他にも本書には様々な含蓄のある見解がちりばめられているが、それらはすべて本人の実体験から導き出されているだけに重みがある。民族対立や移民問題、多文化問題など、様々な問題を抱える21世紀の世界において、人間の意識改革に果たす教育の役割の大きさや、対立解決への不屈の努力を論じた本書の投げかける光は決して小さいものではなく、広く世界中で読まれてほしい名著である。